『金槐和歌集』貞享本系統本文考

――所載歌と歌順の吟味――

犬井　善壽

〈一〉

源実朝の家集『金槐和歌集』（以下、『金槐集』と呼ぶ）の現存諸伝本は、所載歌、部類、所載歌の部類配置、詞書と歌の本文の差異などによって、大別、以下の三系統に分けることができる。

定家本系統――藤原定家が一部分書写し、「建暦三年十二月十八日」という奥書を記している伝本の本文の系統。歌数六六三首。四季・賀・恋・旅・雑の八部類。

類従本系統――『群書類従』巻二三二所収。概ね定家本系統本文であるが、その内の一〇首の歌が欠け、末尾に「一本及印本所載歌」六六首を付載する本文の系統。

貞享本系統――「柳営亜槐」の編になり、貞享四年（一六八七）に版行された版本の本文の系統。歌数七一九首（その内、他人詠三首）。四季・恋・雑の六部類。

この三系統分類は、類従本系統を特立させず定家本系統に含めるとする見方がある①他は、先覚の等しく承認されるところで、稿者も、本文調査によって、確認している。各系統の名称に関して諸先覚に異説があるが、本稿では、早くからの呼称に従っておく。

この三系統の本文の関係については諸説があるが、定家本系統を祖本として類従本系統本文が成り、また、定家本系統本文を編み改めて貞享本系統本文が成った、と見る考え方が大方である。類従本系統と貞享本系統の関係は、類従本版本に付載された「一本及印本所載歌」が貞享版本に拠ることから、類従本系統版本の本文は貞享本系統の後に成ったと見てよい。「一本及印本所載歌」が付載される以前の類従本系統本文と貞享本系統本文の関係は明らかでない。

以上が、『金槐集』諸本の系統分類の大概である。

この三系統にはそれぞれ複数の本が伝わっており、その伝本の間で本文にかなり差異がある。その事実は従前も認識されていたが、具体的に検討されたことは多くない。中で、最近、『新編国歌大観私家集編Ⅱ』②に貞享本系統『金槐集』を高松宮蔵本を底本として校訂された川平ひとし氏が、その「解題」において、

板本の他に幾つかの写本が現存している。いずれも江戸期の写本だが、中には板本刊行以前に流伝した徴証をもつ本もある。……板本のみでなく写本群をも勘案して(三)（貞享本系統。犬井注）の本文を吟味し直す余地はなおあろう。……底本の誤写・欠脱と覚しい箇所に、他の写本を（板本に優先させて）参酌しながら最小限の校訂を施した。

と言われたのは、貞享版本を斥けた点と合わせて、注目される。

本稿においては、貞享本系統本文を持つ以下の管見の諸本について、特に歌の載不載および歌順の相違を検討し、その流伝の様を追及してみる。なお、全ての伝本の調査が完了したわけではなく、中間報告であることをお断りしておく。（上段は本稿における略号）

			歌数
貞	架蔵	貞享四年北村四郎兵衛版行本	七一九
達	宮城県図書館蔵伊達文庫（ゆ九二一・二四八・一二）	版本写本	七一九
上	上田市立図書館蔵藤蘆文庫本	真淵評語本	七一九
筑	筑波大学附属図書館蔵本	真淵評語本	七二〇
初	国文学研究資料館蔵初雁文庫本	真淵評語本	七〇五

玉　鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫本　真淵評語本　七二〇
森　大阪市立大学附属図書館蔵森文庫本　真淵評語本　七二〇
伊　宮城県図書館蔵伊達文庫（伊九一一・二四八　一三）本　七一七
神　神宮文庫蔵本　七一二
高　高松宮蔵本　七一六
青　篠山鳳鳴高校蔵青山文庫本　七一七
書　宮内庁書陵部蔵（五〇一・七二〇）本　七一六
閣　内閣文庫蔵（二〇一　四五六）本　七一七

なお、定家本系統および類従本系統の本文については、
定家　松岡忠良氏蔵　定家所伝本（岩波書店刊複製）他四本調査
類従　架蔵　詳書類従元版　巻二三二　所収　他一本調査
を代表伝本として、その本文を比較検討することにする。

〈二〉

先の調査伝本提示の際に下方に示したように、貞享本系統各伝本の間で所載歌数に差異がある。まずその歌の載不載を検討する。

貞・達・上・筑・初・玉・森の諸本には載り、伊・神・高・青・書・閣諸本には載らない歌が二首ある。貞享版本の本文で示すと、

深夜霜

三三〇　烏羽玉のいもが黒髪うちなびき冬ふかき夜に霜ぞをきける
三三一　夜を寒み河瀬にうかぶ水の淡のきえあへぬ程に氷しにけり

冬哥

三三二　かたしきの袖こそ霜にむすびけれまつよふけぬるうちの橋姫
……
三三六　冬ふかき氷やいたくとぢつらんかげこそ見えね山の井のみづ
三三七　冬ふかみ氷にとづる山川のくむ人なしととしやくれなむ
三三八　我門のいた井のし水冬ふかきかげこそ見えね氷すらしも

の内の、傍線を施した三三一番と三三七番とである。この二首の歌の載・不載に拠って、貞享本系統『金槐集』の伝本は、大別二つのグループに分けることができるのである。一つは貞享四年版本とその転写本（達）および賀茂真淵が評語・校勘を加えた真淵評語本、いま一つは伊・神・高・青・書・閣の写本諸本である。

問題の二首は、定家本系統ではそれぞれ三〇二番・三四二番として載る。《定家本系統所載歌は全て貞享本系統に載る》という事実を状況証拠とすると、この二首の載る貞・達および真淵評語本のグループが貞享本系統の本来の本文で、伊・神・高・青・書・閣の写本ではこの二首が脱落している、ということになる。貞享本系統の原初の本文にはこの二首は伊・神・高・青・書・閣諸本同様に載らず、後に補われて貞・達および真淵評語本のグループのごとき本文になったのなら、貞享本系統本文を編集するために定家本系統本文を編み改めた際にこの二首のみが除かれたわけで、その理由を明確にする必要がある。現在のところ、稿者はそれを証明できない。

但し、貞本等のグループの本文には不備がある。三三一番の歌は「深夜霜」という詞書に合わない。「氷」の歌である。貞本等のグループの祖本はこの歌の歌題の把握を誤っている。定家本系統は、

ふかきよのしも

二九九　むばたまのいもがくろかみうちなびきふゆふかきよにしもぞ
をきける

冬哥

三〇〇　かたしきのそでこそしもにむすびけれまつよふけぬるうちの

はしひめ

三〇一　かたしきのそでもこほりぬふゆのよのあめふりすさむあか月のそら

三〇二　夜をさむみかはせにうかぶみづのあはのきえあへぬほどにこほりしにけり

と、問題の歌を「冬歌」としており、貞本等のごとき詞書との齟齬はない。伊本等のグループの祖本がこの歌をこの位置から除いたのなら、歌と詞書との齟齬が理由であると見てよい。貞本等のグループの祖本がこの歌を増補したのなら、歌題に注意を払わず不適切な位置に増補したことになる。この系統の祖本の編集時の誤謬であるのなら、定家本系統二二九番「ふかきよのしも」の後ろに「冬歌」の三〇二番「夜をさむみ」の歌を誤って配してしまったのである。

いま一首の三三七番が伊本等のグループで欠ける理由は判らない。この歌は、定家本系統でも、「冬歌」として三四二番に載る。

冬哥

三三八　ゆきふりてけふともしらぬおく山にすみやくおきなあはれはかなみ

三三九　すみがまのけぶりもさびしおほはらやふりにしさとのゆきのゆふぐれ

三四〇　わがゝどのいた井のしみづふゆふかみかげこそみえねこほりすらしも

三四一　ふゆふかみこほりやいたくとぢつらしかげこそ見えね山の井のみづ

三四二　冬ふかみこほりにとづるやまがはのくむ人なしみとしやくれなむ

三四三　ものゝふのやそうぢがはを行く水のながれてはやきとしのくれかな

歌順も、貞享本系統の三三六・三三七・三三八番は定家本系統では順に三四一・三四二・三四〇番で、小異のみである。貞本等の本文が元の形で、伊本等の祖本において初句から第二句にかけての「冬深み氷」の語に拠る目移りの誤脱が生じたという可能性が高い。

こう見ると、この二首を載せる貞・達・真淵評語本のグループの本文がこの二首を載せない伊本等写本グループに先行すると見ることができる。但し、貞本等のグループの本文に不備があり、必ずしも貞・達・真淵評語本のグループの本文が本来的とは言えない。

各伝本固有の歌の載不載については後に言及する。本節では、貞享本系統諸本の大別グループ分けに関わる載不載を検討してみた。

〈三〉

版本等のグループつまり貞・達・上・筑・初・玉・森諸本と写本のグループつまり伊・神・高・青・書・閣諸本との間で歌順が相違することが三箇所ある。この事実も、貞享本系統『金槐集』の諸本が貞享版本とその転写本および真淵評語本のグループと写本群のグループとに大別できる証拠である。その歌順の差異を検討する。

まずその一。貞・達・上・筑・初・玉・森の本文を貞本で示すと、

雨中柳

四一　青柳の糸よりつたふ白露を玉とみるまで春雨ぞふる

四二　水たまる池のつゝみのさし柳この春雨に萌出にけり

四三　あさみどりそめてかけたる青柳の糸に玉ぬく春雨ぞふる

早蕨

四四　さわらびのもえ出る春に成ぬれば野邊の霞もたなびきにけり

とある四二番と四三番が、伊・神・高・青・書・闇の諸本では、

雨中柳

四一　青柳のいとよりつとふしら露をたまとみるまで春雨ぞふる

四二　あさみどりそめてかけたる青柳のいとにたまぬくはる雨ぞふる

四三　水たまる池のつゝみのさし柳このはる雨に萌出にけり

早蕨

四四　さわらびのもえいづる春に成ぬれば野べのかすみもたな引にけり

（伊二拠ル）

と、逆順になっている。いずれがこの系統の本文として本来であるか判らない。四一番「青柳の」の歌は定家本系統には載らず、類従本系統では「一本及印本所載歌」の六六六番に載る。定家本系統では二四番「浅緑」二五番「水たまる」と、伊本等のグループと同順である。「早蕨」の歌は、定家本系統では一九番に「はるのうた」の詞書で載せられている。問題の二首の歌が定家本系統と同順であるという点で、伊本等のグループの本文が元の順であるのかも知れない。尤も、前後の歌は必ずしも定家本系統と同順ではないが。

その二。貞・達・上・筑・初・玉・森の諸本では（貞二拠ル）、

田家秋

二四六　山田もるいほにしをれば朝な〳〵たへずきゝつるさをしかの聲

二四七　から衣いなばの露に袖ぬれて物思へともなれるわが身は

虫

二四八　をざゝ原夜はに露ふく秋風をやゝさむしとや虫の鳴らん

二四九　庭草の露の数そふ村雨に夜ふかき虫の聲ぞかなしき

の位置に載る二四七番の歌が、伊本等のグループでは、

山邊眺望といふ事を（但、二五七番詞書）

二五九　秋をへてしのびもかねに物ぞ思ふ小のゝ山べのゆふぐれのそら

田家露

二六〇　から衣いなばの露に袖ぬれてものおもへともなれるわが身は

二六一　秋田もるいほにかたしくわが袖にきえあへぬ露のいくよをきけん

（伊二拠ル）

と、位置を異にしている。この歌は「田家秋」「田家露」いずれの詞書であっても不都合ではなく、貞本等のグループの本文でも伊本等のグループの本文でも、矛盾はない。この歌、定家本系統では、

田家秋といふ事を

二三二　からころもいなばのつゆにそでぬれてものおもへともなれるわが身か

二三三　山だもるいほにしをればあさな〳〵たえずきゝつるさをしかのこゑ

となっている。歌順は逆であるが、詞書の点で、貞本等のグループが定家本系統と同じ扱いなのである。尤も、貞本等のグループで続く「虫」の歌は定家本系統では二〇五・二〇六番とかなり離れた位置にあり、伊本等のグループで同じ詞書で纏められている「秋田もる」の歌は定家本系統では二三〇番という「田家秋といふ事を」の直前の歌群の二首前の歌である。この事実からすると、必ずしも貞本等のグループがこの系統の元の本文とも言えないのである。

いま一首、貞・達本等のグループにおいては、

桜（但、七〇八番詞書）

七〇九　いにしへの朽木の桜春ごとにあはれむかしと思ふかひなし

芦

七一〇　難波がたうきふししげき芦の葉にをきたる露の哀世中

無常を

七一一　かくてのみありてはかなき世中をうしとやいはんあはれとや

いはん　（貞二拠ル）

という位置に載る七一〇番が、伊本等のグループでは、

雑哥中に

六八五　世にふればうきことの葉のかずごとにたえずなみだの露ぞを

きける

六八六　なにはがたうきふししげき芦のはにをきたる露のあはれよの

中

六八七　歎わび世をそむくべきかたしらずよしのゝをくもすみうしと

いへり　（伊二拠ル）

と、その位置が異なっている。「難波潟」の歌は、「憂き節繁き」「哀れ世の中」とあるように、世の無常を詠じたもので、貞本等のグループのごとく、春の「桜」を以て同じ主題を詠んだ歌に続き、「無常を」の詞書の歌の前に配されても、伊本等のグループのごとく、「雑歌」として「世」の「憂き」ことを詠んだ歌の中に配されても、いずれであっても妥当である。因みに、定家本系統では、

雑哥

六〇〇　いづくにてよをばつくさむすがはらやふしみのさともあれぬ

といふものを

六〇一　なげきわびよをそむくべきかたしらずよしのゝおくもすみう

しといへり

六〇二　よにふればうきことのはのかずごとにたえずなみだのつゆぞ

をきける

あし

六〇三　なにはがたうきふしゝげきあしのはにおきたるつゆのあはれ

よの中

と、無常を詠んだ歌の歌群の中に配されている。伊本等のグループは定家本系統に近い扱いをするのである。但し、定家本系統は、この歌の詞書を「あし」とする。これは貞本等のグループと同じである。この歌の場合も、貞本等のグループの本文が本来か伊本等のグループの本文が本来か、決着はつけがたい。詞書の点で、貞本等のグループの本文が定家本系統と合致する、と言えるだけである。

貞・達・上・筑・初・玉・森諸本と伊・神・高・青・書・閣諸本との間で歌順が異なる三例を検討してみたが、貞享本系統としていずれが本来であるか、判然としない。定家本系統の歌順や配置を尺度にすると、最初の例は伊本等のグループの本文が定家本系統に近く、二番目と三番目の例は貞本等のグループの本文が定家本系統に近い、ということは明らかであるが、先後の決着はつかない[3]。

〈四〉

貞享本系統『金槐集』の管見諸本は、その所載歌と歌順の差異によって、貞・達・上・筑・初・玉・森本のグループと伊・神・高・青・書・閣本のグループに分けることができる。前者は貞享四年版本を経た本文のグループ、後者は写本のグループである。両者の関係が判然としないことは、前二節において説いたとおりである。

ところで、本稿冒頭に示した諸伝本の所載歌数に相違があることからも判るように、各々の伝本で固有の歌の出入りや歌順の前後や移動がある。それらについて、粗々を整理しておくことにする。

貞享版本の所載歌は七一九首であるが、その北村四郎兵衛版の本を転写した達本も、所載歌は七一九首で、歌順も変わりがない。

真淵評語本は貞享版本を底本にしているが、その内、上本は貞享版本と間で歌の出入りがない。ただ、貞享版本でいうと二七番と二八番および四二一番と四二二番が、それぞれ逆順になっている。

玉本は、一〇一番歌が行間書入れとなっており、なお且つその歌が一〇五番として重出している。都合七二〇首載るのである。

筑本は、貞享版本の番号でいうと、三五七番（この本でも三五七番）が三五八番として重出、五九五番が欠、六五四番が六五五番として重出、六七九番と六八〇番とが逆順で、都合七二〇首載る。

初本と森本とは、共通する歌順の相違がある。貞享版本の番号でいうと、二九九番と三〇〇番とが逆順、四六五番が四六八番の後ろに載り、五〇五番と五〇六番とが逆順、五一四番と五一五番とが逆順、五八一番が五八三番の後ろに載り、五九〇番と五九一番とが逆順、六二二番が六二七番の後ろに載る、といった具合である。両本の関係の密であることが知れる。尤も、個別に出入り等がある。

初本は、四〇一番と四〇二番を欠く。また、四一一番と四一二番とは逆順である。それに、五三五番から五四六番までは第四二丁の落丁で、歌を欠いている。初本の所載歌は七〇五首になる。

森本は、四〇一番と四〇二番とが逆順、また、六七二番はこの本では六七三番と五九一番とに重出している。それに、初本が落丁で欠いている貞享版本五三五番から五四六番までの一二首の歌が、雑部の諸所に補入されている。歌番号を示すと、貞享版本の五三五番が五三三番に補われ、以下、順に五六三・五六二・五一二・五〇三・四二三・五〇〇・五五三・五五四・五三四・五五一に補われ、貞享版本の五四六番が五一四番に補なわれている。別に森本について「その歌順が貞享版本や他の真淵評語本とは大幅に異なる箇所がある」と報告したが[3]、それは、類従本系統に拠る校訂と、いま示したような、初本の落丁で生じた歌の脱落を諸所に補ったことが大きな原因である。森本の所載歌数は差引き七二〇首となる。

伊本等のグループの諸本について言うと、伊・青・閣の三本は、グループとしての歌の出入りと歌順の相違以外には、独自の出入り等はない。近似の本文であり、その所載歌は七一七首である。

高・書二本は前の三本とほぼ同じであるが、貞本の本文でいうと、

三七四　我庵はよしのゝをくの冬ごもり雪ふり積てとふ人もなし

三七五　をのづからさびしくもあるか山ふかみ草の庵の雪の夕ぐれ

の二首の上句と下句を繋げて一首の歌とするという誤写があり、

三七二　わが庵はよし野のおくの冬ごもり草のいほりの雪の夕ぐれ

という歌になっている（高ニ拠ル）。「庵」の語の重出を初め、不可解な歌である。両本の所載歌はこれで七一六首となる。

なお、書本は、貞享版本の歌番号でいうと四九三番が四九五番の後ろに載る。高本にはこの移動がなく、書本に先行すると言える。

神本の所載歌が七一二首と少ないのは、貞享版本でいうと八五・三〇七・三二〇・四三六・五九〇の五首が欠けるからである。

以上が、各伝本固有の歌の出入り等である。調査伝本を広げることで諸本の親疎関係は更に明確になろうが、版本の転写本である達本が貞本に極めて似ること、真淵評語本諸本が貞享版本から少々離

れることなど、貞本等のグループ内でも本文に差異のあることが判った。また、真淵評語本の内部でも諸本に親疎があること、初本と森本が極めて密な関係にあることが判明した。伊本等のグループも、伊・青・閣三本が近似し、高・書が似ることなどが判然とした。

〈五〉

貞享本系統『金槐集』の諸本の本文が、歌の載不載および歌順の差異に拠って、大別二つのグループに分けられること、また、貞享版本、その転写本、真淵評語本など、更に諸伝本に親疎があることを明らかにした。最後に、諸伝本間の歌本文の差異に拠ってその大別二グループ分けが確認できることを、一首の歌を例に示したい。

貞享本系統『金槐集』の春部六番歌の貞享四年版本の本文は、

六　はるはまづ若菜つまむとしめをきし野邊とも見えず雪のふれゝば

である。表記の差異は、煩雑でもあり、ここでは取上げないとして、諸本の本文を見ると、まず詞書に差異がある。貞・達・上・筑・初・玉・森は引用と同様「春のはじめ」、伊・神・高・青・書・閣は「春のはじめに雪のふるをみて」とある。本稿で明らかにしたのと同じ諸本がグループとして対立する本文を有しているのである。歌語にも差異がある。初句が「春はまづ」であるのは貞・達・上・筑・初・玉・森諸本、伊・神・高・青・書・閣諸本は「春たゝば」とする。ここでも先に示したグループの間で本文が対立している。

この歌の例のように、貞本等のグループと伊本等のグループとで対立する本文を有することは、貞享本系統の諸本において極めて多い。要するに、先の大別二グループの間で、歌の載不載および歌順の差異が見られ、詞書と歌語に対立する相違が見られるのである。

詞書と歌語の本文の相違に関して、注目してよい事柄がある。

この歌の詞書を定家本系統（五番）と類従本系統（五番）に見ると、定家本系統は「はるのはじめにゆきのふるをよめる」、類従本系統も同文である。小異はあるが、伊本等のグループの詞書が定家本・類従本の系統に近いのである。歌語の異同についても同じである。定家本系統も類従本系統も「春たゝば」とする。伊本等のグループと同じ本文なのである。つまり、貞享本系統の中で、伊本等のグループの本文は、貞本等のグループの本文よりも定家本系統の本文に近いのである。これは、この歌の例のみではない。例示する紙幅はないが、その一部を『後葉集』入集実朝歌の本文を検討した際に報告したように[3]、かなり多くの歌に見られるのである。

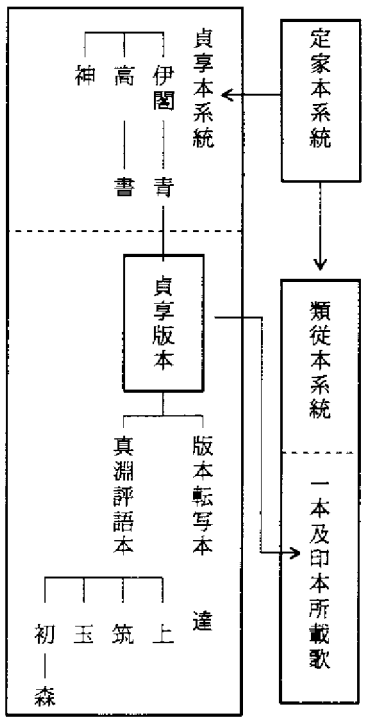
各本固有の本文の差異については、まだ稿者の調査伝本が多くなく、ここで例示検討することは差し控える。ただ、伊本等のグループの中の青山本が貞享版本の本文に接近しているという事実を、本稿とは別に報告した[4]。御参照いただければ幸いである。

〈六〉

煩雑に亘った本稿を整理して、今後の課題を確認したい。

『金槐集』諸伝本の中で、貞享本系統つまり貞享四年に版行された『鎌倉右大臣家集』と同じ部類・部類配置・歌順を採る伝本がかなりの数に上る。それらについて、その所載歌と歌順の差異を検討すると、この系統本文を有する伝本は、大別二グループに細分できる。また、各グループの諸本固有の歌の出入りと歌順の差異に拠っ

て、諸本の親疎関係がある程度判然とする。それに、定家本系統本文との親疎関係もある程度判る。それらを整理してみると、概ね、以下のとおりである。尤も、これは流伝の関係を示したものであって、直接の書承関係を示すものではない。



最初にお断りしたように、貞享本系統『金槐集』の伝本は他に多く、本稿は、稿者の調査の中間報告である。今後、調査伝本を広げ、更に精査を試み、この系統の伝本とその本文の流伝に関して改めて報告する所存である。ここでは、貞享本系統『金槐集』諸本の本文が、大別すると、版本を経たグループと写本のグループとの二つに分けられること、そして、写本のグループの本文の方が定家本系統の本文に近いこと、これだけは明かにしておきたかったのである。

注1、樋口芳麻呂氏『金槐和歌集』（新潮日本古典集成。昭和五六年6月）の「解説」は、定家本系統を「建暦三年本」、貞享本系統を「柳営亜槐本」と呼ぶ「二種類」とする、など。

2、『新編国歌大観　第四巻　私家集編Ⅱ』（昭和六一年5月）所収「金槐和歌集（実朝）」。

3、歌の配列を見るとき、貞本等のグループの本文よりも伊本等のグループの本文の方が、言葉の連続やイメイジの連想という点で、円滑な配置である。例えば、一番目の貞本等の歌順は、

《貞享》　柳　づ
柳し　露　雨　出緑蕨辺
青さ糸白玉春春水池堤萌浅早野霞

《伊達》　柳　づ
柳し　露　雨　出緑蕨辺
青さ糸白玉春春水池堤萌浅早野霞

と、連続が密でない。特に四三と四四との間に断絶があるが、伊本等は連続が密である。但し、これでも、系統としていずれが本来かは判らない。系統全歌の配列原則の分析を俟つ。

4、「谷森本『後葉和歌集』所載実朝歌の本文吟味から――貞享四年版本系統『金槐和歌集』の本文流伝の問題へ――」（「文芸言語研究　文芸編」二八・平成七年9月）

（筑波大学文芸・言語学系教授）